

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿 10月12日（金）放送分

テーマ「奄美歳時記」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。県立奄美図書館です。今週のこの時間は、今年度第7回目の、シリーズ「奄美歳時記^{さいじき}」をお送りします。

10月23日は旧暦の9月9日、加計路麻島^{かけろまじま}では「諸鈍シバヤ^{しょどん}」が行われます。「諸鈍シバヤ」は、加計呂麻島で最も大きな集落である諸鈍の大屯^{おおちよん}神社で披露されている民俗芸能で、昭和51年に国の重要無形民俗文化財に指定されました。

昔から奄美には、それぞれの集落で特定の日仕事を休み、集落のみんなで楽しむ祭りがあり、それをナグサミと呼んでいました。諸鈍では、このナグサミの日にシバヤが演じられる習慣があったと伝えられています。

では、なぜ「シバヤ」と呼ばれるようになったのでしょうか。それには、二つの説があります。一つは、観客に見せる「芝居」がなまって「シバヤ」になったという説です。もう一つは、演じる者が出入りする小屋を、葉がついた木の枝や小さい木の「柴」で周りを囲んでいたのが「シバヤ」になったという説です。

この「諸鈍シバヤ」の由来を証明する記録等は存在しないのですが、古くから、次のように言い伝えられているようです。

奄美には、壇ノ浦の戦いに敗れた平家来島の伝説があります。その一つに、諸鈍には^{たいらのすけもり}平資盛が城を構えて住み、生涯を諸鈍で過ごしたとあります。その資盛は、時折、城に土地の人たちを招き入れ、お酒をふるまったり、芸を披露したりして交流を深めていました。資盛が亡くなった後、土地の人々の手によって演じられたのが「シバヤ」の始まりであると伝えられています。

「諸鈍シバヤ」は平家文化の遺産であり、800年の古い歴史と伝統を誇る民俗芸能であると信じられています。

また、諸鈍シバヤ保存会長として、長い間継承に力を尽くしてこられた吉川 実^{よしかわみのる}さんがまとめた「国指定重要無形民俗文化財『諸鈍シバヤ』」には、「奄美は日本本土と沖縄との中間に位置し、中でも諸鈍湾は古来^{こらい}南北海上交通の中継地としての要所であり、南北交通の頻繁な時代背景の下、南の琉球文化、北からの大和文化^{やまと}がこの地に伝播^{でんぱ}し、渾然^{こんぜん}一体となって定着し、諸鈍『シバヤ』として花開いたであろうこともまた容易に推測できることである。」と記されています。

歴史と伝統を誇る「諸鈍シバヤ」ですが、行われなかった時期が二度ありました。一度目は明治時代のことです。明治の初め頃まで二十種類余りの演目があった「諸鈍シバヤ」を奄美本島の村で巡業し、評判がよかったので、徳之島で演じることになりました。そこで大失敗をし、大正初めの諸鈍小学校の落成式での復活まで中断していました。

二度目の中断は、昭和18年から31年のことです。戦中戦後の経済不況や物資不足、道具がなくなっていたために、中断していました。

今では、諸鈍子ども会も毎年出演していて、先日、県優良少年少女団体・地域高校生クラブ等表彰を受けました。諸鈍シバヤ育成会では以前から後継者育成に取り組んでいますが、少子高齢化に伴って、20年程前からは校区の小中学生が一緒になって練習に励んでいます。現在、育成会員10名、小中学生12名で活動しており、町の貴重な伝統芸能、文化を継承するとともに子ども会活動の充実・振興を図るために表彰されました。

毎年、旧暦9月9日の大屯神社には、諸鈍シバヤを楽しむために多くの観客が集まります。継承のピンチを乗り越えながら「諸鈍シバヤ」を支え、つないできた多くの人々の想いを感じながら、800年の古い歴史と伝統を誇る民俗芸能を楽しんでみてはいかがでしょうか。

以上、県立奄美図書館でした。